

ウワサの保護者会！

今日のテーマは「親子で話してる？戦争のこと平和のこと」



【今回のホゴシャーズ】

- パンダ (母) : 長女・中2 / 長男・小6
- 金のなる木 (母) : 長男・小6 / 次男・小4
- れんげ (母) : 長男・高3 / 長女・中3
- リリー (母) : 長女・28歳 / 次女・高3 / 長男・小5
- コアラ (母) : 長女・高1 / 次女・小5
- チェリー (母) : 長女・中3 / 次女・小1
- ポンナレット (母) : 長男・24歳 / 長女・22歳
- ウミツバメ (母) : 長女・大1 / 次女・高1

高山 : 保護者の中で、戦争について話すことってふだんありますか？

一同 : ないです。

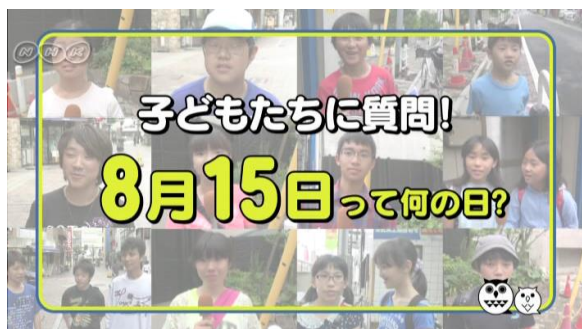
ポンナレット : あえて言えば「受験戦争」ですか？ (笑)

高山 : そっちの戦争はあるんですね。

一同 : そうですね。

子どもたちに質問！

「8月15日って、何の日か知ってる？」



「う～ん、父の日は終わっているし…」(小学5年生・男子)

「8月15日？…海の日」(中学2年生・男子)

「山の日」(中学2年生・男子)

「花火大会とか？」(中学1年生・女子)

「NHKの日」←ありません！(小学6年生・女子)

「戦争の…終戦？」(中学3年生・男子)

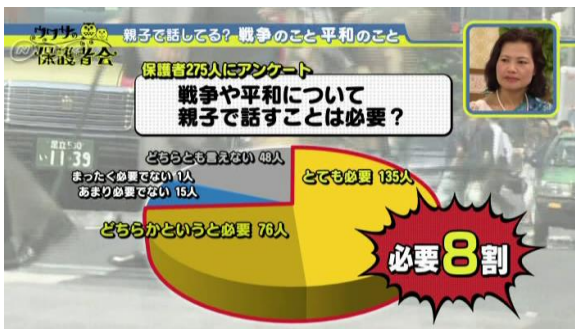
そう！8月15日は終戦の日。

大きな犠牲をはらった太平洋戦争から70年。

戦争を知らない世代が増えつつある今、子どもたちの戦争への関心は薄れている。

番組が保護者にアンケートを行った結果、

およそ8割が、戦争や平和について、親子で話すことは“必要”と答えた。



一方で、

「話をどう切り出しているのかわからない」

「親と離れて暮らしていて、誰に聞いていいかわからない」

「真面目なことを話すのが気恥ずかしい」

など、多くの悩みが寄せられた。

皆さんは、親子で戦争のこと、平和のこと、話していますか？

チェリー：うちは全く、戦争のことを会話にしたことがなくて。

まず、私自身に正しい知識がないということ。知識もなければ自信もないので、正しい知識を伝えるためには、1から勉強し直さなければいけないと思うんですね。

でも、そんな時間も能力もないので、できれば学校から、まずは知識を子どもに与えてもらったほうが、子どももすんなり受け入れられるんじゃないかと思うんですね。

リリー：私は、いつ、どこで、どういうタイミングで、私が経験もしていない戦争を子どもたちに教えていくか（が難しいと感じていて）。私は、また聞きで「おばあちゃんこう言っていたな、確かこうだよ」って。あとはちょっと資料見て、こうだよっていう伝達方法なんですけど。

高山：自信がない？

リリー：ないです。

金のなる木：怖いとか、そういうのが先に立っちゃいそうで…。

子どもたちに、戦争のことを今伝えて、果たしてどういう理解をするのか、どういう気持ちになるのか…。まだ、ちょっといいかな。

パンダ：私は、一生懸命伝える努力をしているんですけど、戦争に関するニュースを見ていて、息子に話をきいてみたら「だって、歴史で習ったし、知っているし、間違わない」みたいな、変な自信を持っているんですね。

高山：なるほど。覚えていればいい、みたいな。

パンダ：そうですね。リアリティがないのか、伝わっている感じがしません。

子どものお友だちがお家に遊びにきても、ゲーム持って「死ね～！」とか言いながら…。もう怖～って。

高山：死というものがあんまり身近じゃない、わかってないのかなって感じですかね。

高山：ここで、専門家にお話を聞いてきたんですが、今は直接、戦争体験者から話を聞く機会が少なくなってきたので、戦争をリアルに感じることはできないのは仕方がないことでしょう。生まれてしまった距離感を埋めるためには、親が子どもの興味を見逃さないこと、これが大切なんじゃないかと。

また日頃から、コツコツと平和を考えるタネをまくこと、これもポイントになるんじゃないかという。



尾木：だから、やっぱりね、戦争とか平和のことってというのは、押しつけはダメだけど、ニュースを見ながら「お母さんこういうこと辛いわ」とか、そういう独り言で子どもに感じさせるのもよいと思いますよ。

家の女房なんて、独り言うるさくて（笑）

（一同笑）

高山 : こちらにいらっしゃるウミツバメさんは、お子さんのちょっとした興味をすくい上げて、伝えることができたという経験の持ち主なんです。

ウミツバメさんの次女、なるみさん。

昨年、中学2年生の春休みに、中東ヨルダン国内にある、ザアタリ難民キャンプを訪れた。激しくなるシリアの内戦を避けるため、避難してきた人々が暮らしている場所だ。

きっかけは、ウミツバメさんが偶然新聞で見つけた、子どもリポーターの募集記事。「将来、海外で働きたい」と言っていた娘に、切り抜きを渡した。

なるみ：まず、ヨルダンってところが、どういうところなのか知らなかったということ、難民キャンプってものを知らなかったということ。
全然わからないので、そういうわからないところに行ってみたって思ってた。

ヨルダンに1週間滞在したなるみさん。

シリア難民の子どもたちと一緒に、学校の授業に参加するなど、交流した。

なるみ：戦争とか、そういうのに巻き込まれている人は、暗そうだなって思っていたんですけど、でも笑顔で接してくれたりして、すごく明るい印象を持ちました。
シリアの友だちとアクセサリーとかを見ていて、キラキラしたものを嬉しそうにみていたので、日本と変わらないなって思いました。

なるみさんが特に仲良くなった、13歳のダーリア。

キャンプの中にあるダーリアのテントを訪れ、話をきいた。

ダーリア：兄は亡くなりました。

オシャレで、笑顔の耐えないダーリアも、内戦で辛い思いを抱えていた。

ダーリア：写真を見るたびに、兄を思い出して、たくさん泣いてしまいます。時々電話で話していました。そして、「今度会うときは贈り物を持って行くから楽しみにしていて」と言ってくれました。

ダーリアの話聞いたなるみさんは・・・

なるみ：笑顔を見せてくれる。本当はずっと悲しさを抱いているのに。そう思うと、彼らが無理しているように見えて、私には苦痛だった。申し訳なかった。

なるみ：ダーリアが考える平和とはなんだと思いますか？

ダーリア：暴力がなくなって、みんなが安全で、平穏に暮らしていけることです。

なるみ：今まで戦争っていうと、兵士の人たちが戦っている光景とかを、パッと思い出していたんですけど、今戦争って言われたら、難民の女性や子どもとかもいるんだなって思います。

私、学校とかに行くと、必ず宿題とか出て、それも毎日出て、小テストとかもあったり…。それって当たり前というか、時々嫌だなとか、学校行きたくないなって思うんですけど、ダーリアやシリアの子たちにとっては、学校に行くこととか、宿題を出されることとかって、当たり前じゃないっていう現状を思い知らされて、感謝して生活しないといけないんだなって思いました。

一同：素晴らしい。

高山：たくましい。表情も…。でも、不安はなかったですか？ヨルダンですよ。

ウミツバメ：昨年いろいろあって知った訳ですけど、それまでは知らない国でして、主人とも「今だったら反対しちゃっていただろうね」と話しています。

高山：主催しているNPO団体は、20年以上この活動をしているんですけど、そのときどきの情勢というのを見極めて活動しているということで、特に危険はなかったってことですね？



ウミツバメ：はい、もちろんそうです。そういうときでした。

高山：なるみちゃんは、変わりました？

ツバメ：世界に目がいきまして、新聞もよく読むようになったり、部屋に持っていってしまうから新聞を1紙増やして取るようになったり。

尾木：すごいね～。

ポンナレット：お子さんが行かれた国の名前がニュースとかに出たら、すぐ反応すると思うんですよ。そういう自分の関わった場所とか、友だちの出身国とかね。だからますます興味を持って、次のステップへね。

高山：将来にきっと繋がりますよね。

ツバメ：記事を見つけたのも偶然でしたし、むしろ、積極的にしてくれた娘に、戦争のことも、いろいろ教わっている状態なんで。

尾木 : だからやっぱりね、いろんなところで、この戦後70年の機会に、共に学んで、むしろ子どもに教えてもらう、子どもから学ぶようなこともでもいいから、素材として取り上げていくというかな。親子で話題にしていくことが、すごく大事だと思う。

子どもたちってというのは、ウミツバメさんのお嬢さんように、無限の可能性を持っていますから。みんな同じ可能性をもっていると思うの。語り継いでいくというよりも、一緒に語り合っていくという、そのスタンスでよいと思いますよ。

高山 : ちょっとした、お母さんお父さんのひと言で、お子さんが気付いた経験というのは？
パンダさん、どうですか？

パンダ : 争いごとのニュースをみているときに、私がいつも「敵でも味方でも、亡くなってしまったり、傷ついてしまったりするのは、罪のない人たちばかり」という話をよくして、娘の学校で、田んぼで稲を植える実習がありまして、正義感の強い男の子2人の間で、なにか正義の戦いが始まってしまったですね。田んぼをはさんで。結局最後、泥の投げ合いになってしまって、周りにいた人が泥をかぶって帰ってきて、お母さんが言っていることがよくわかったって。そういうんですけど、わかっているのかなって(苦笑)



高山 : お子さんが、ちゃんとお母さんの言葉を、頭の中にメモリしていたんですね。

ポンナレット : カンボジアのことわざで「ゾウが戦うとアリが死ぬ」という言葉があるんですよ。ゾウってというのは権力のあるほうで、アリは私たち、一般の市民や子ども。スゴイ言葉だなんて。

高山 : ちなみに、コアラさんは？

コアラ : はい。おじいさんの写真があるんですけど。この写真を見せながら、こういうかたちで戦争に行っていたことを話して。子どもは15歳なんですけど、もし自分の親が行くことになったら嫌なので、戦争はやっぱり嫌って。大事な人がいなくなるのは嫌って言っていました。



れんげ：娘が沖縄旅行を当てまして、ひめゆりの塔に行ってみようかってことで行きました。実際に私も行ったことがなかったので、娘と2人で「一緒に勉強しようか」って「実際に行って、あったことを知りたいよね」ということで行ってきました。

今、娘は中学生なんですけど「あの時代があったから、今の平和があるんだよね」って、言っていたので、連れて行ってよかったなとは思っています。

チェリー：私もちょっとエピソードがありまして…。

昨年、沖縄に家族旅行に行きまして、車で移動してましたら、米軍の基地の横を通ったんですね。私も目にするのが初めてだったんですけど、あまりの規模に驚きまして。私でもこんなに驚くんだから、娘たちもなにか感じて、いろいろ考えるきっかけになるなと思い、ぜひ娘たちに目に焼き付けてもらいたい。娘たちに…と思って、ふっと振り向いたら、もう爆睡！もう爆睡中だったんです。でも、絶対見てもらいたいから、「ねえねえ。見て、見て」って言ううちに通り過ぎてしまって…。いつかリベンジしようと思っているんですけど。



子どもたちに質問！

「戦争」ってどんなもの？



「親たちとも暮らせないし、別の所で暮らすことになるからイヤ」

(小学5年生・男子)

「戦いごっこ。人を殺し合って楽しんでいる感じ。本当は殺したってなにも楽しくないのに」

(小学6年生・女子)

「美味しかったものも食べられないし、今まで買っていた物も買えなくなっちゃうし、悲しいなと思います」

(小学6年生・女子)

高山： ポンナレットさんは、唯一、この中でも戦争体験者なんですよ。
これまで、どんな道を歩んできたのか、こちらをご覧いただきたいと思います。

カンボジアのプノンペンに生まれたポンナレットさん。
両親と8人兄弟の10人家族、いつもにぎやかで明るい家庭だったという。

ポンナレットさんが10歳のとき。
内戦が続いていたカンボジアでは、ポル・ポトがクーデターで政権を奪った。
市民に過酷な労働を強制し、さらに虐殺を繰り返した。
わずか4年足らずで、170万人以上が亡くなった。

これは最後の家族写真。



ポンナレットさんの両親と4人の兄弟たちも、虐殺や病気によって命を落とした。

ポンナレット：気がつけば10人家族が4人になってしまっている。それこそ「どうして？」って。あの時代に生きた本人でも「どうして？」って。ただ、1人ずつ、1人ずつ、私の目の前からいなくなっていく。こんな残酷なことってあるのね。

いつも一緒に遊んでいた末っ子のナエットは、まだ8歳だった。

ポンナレット：なんて言うんですか…。英語でいうと「I miss you.」みたいな。「会いたいな」っていう、それが素直な気持ちじゃないですか。

ポル・ポト政権崩壊後も、内戦状態が続いた。

ポンナレットさんはクーデター前から留学していた姉を頼って、日本にやってきた。

そして日本人の男性と結婚し、2人の子どもに恵まれた。

長女のまきさん。子どもの頃、お母さんが、なぜカンボジアを離れ、日本に移り住んだのか、聞かされていなかった。ポンナレットさんは、自分の両親のことを聞かれても「天国にいるのよ」とだけ答えていたのだ。

ポンナレット：簡単に「戦争で亡くなったんだよ」って言うのも、すごく難しいんですよ。「戦争ってなに？」って言われたら、どうします？「人と人が殺し合うのが戦争だよ」って。さらに「なんで人と人が殺し合わなきゃいけないの？」って言われたら、どうやって答えればいいのか…。難しいですよ。

まきさんが13歳のとき、慰霊のため、家族が殺されたカンボジアの村を訪れる機会ができた。

ポンナレットさんは思い切って、娘も連れて行くことにした。



積み上げられた何千もの遺骨を目の当たりにし、まきさんは言葉を失った。

まき：衝撃的でしたね。もしかしたら、母もこの中に眠っていたかもしれない。一步間違っていたら眠っていたかもしれないと想像したら…。本当に胸が痛かったですね。

ポンナレット：正直、黙っていたいんですよ、本当は。こんな辛いことを伝えなきゃいけないって。でも戦争中に「やっぱり戦争はいけないよね」とか、そんな会話している場合じゃないので。やっぱり、今だから冷静に「どうして戦争はよくないの？」とかいろいろ言い合えるじゃないですか。私はこれ以上の犠牲を払いたくない、というのが正直な気持ち。

れんげ：全然関係のない人が亡くなっていくのが、本当に一番つらくて、それが今一番心の中に響いていて。

ポンナレット：やっぱり、犠牲の出ない戦争ってないので。

そして、5年10年後、その場に行ったら、もうあっという間に新しいビルができあがるじゃないですか。そういうものは再建できるけど、人の命は一度失ってしまったら、もう二度と戻ってこない。やっぱり、会えないのが寂しいですよ。



ポンナレット：だから、写真を眺めていても、時々涙が出てきたりするんですよ。

それは、子どもに同じ思いをさせたくないし、あの寂しさは、やっぱりね…。

高山：娘さんも、慰霊をされて。

ポンナレット：そうですね。帰ってきてからものすごく明るくなった。「お母さんが生き延びてくれたから、今の自分の命がある」ということが、その慰霊を通して、彼女の感じてくれた大事な部分なんです。

だから、ただ「戦争がいけない」、「平和がいい」じゃなくて、生きていることに価値がある。いくら行く前に口で説明してもなかなか伝わらないじゃないですか。でも、現場に、リアルにその場に行ったほうが、いろいろ感じとってくれるんですね。

チェリー：そういう機会を持ってないお子さんが、たくさんいらっしゃると思うんですね。

高山：圧倒的多数ですよ。

チェリー：そういう子たちには、どういう伝え方があるのかなって？

尾木：今のように直接お話を聞いて、ぼくたちもみんな感動して、「命をつなぐ」という大事さを我々の自分の責任として感じたわけですけど。平和とか戦争とか大それたことではなくて、「命をつなぐ」ということが大事なんだなってことがわかったわけですけど。

直接お話を聞くってこと、それから例えば映画なんかたくさんありますよね。小説とか絵本とか。大切なのは、それに接する機会をたくさん得るとのことだと思っんですね。

でもね、子どもって不思議なんですけど、通じてないなって親が思っているんですけど、どこかに残っていて、国語とか社会科とか、いろんなものを通して戦争のことを教えるでしょ。そうすると「あっ、お母さんが言っていたな」と、ふと結びついてくるの。そのとき、結びつくものがなにもないお子さんと、結びつくものがあるお子さんとは、深まりかたが全然違ってくるの。

ポナレット：本当にこうやって語り合えるのも、今は平和だからこそ、安心して語れるじゃないですか。私もこの国に来て、平和で、結婚して、子どもを生み育て、もうなんてパラダイスだろうって。だって70年間戦争しないルールって、世界中探しても日本くらいじゃないですか。世界中がうらやましがっていると思うんですね。これって日本国民全体の財産ですよ。

尾木：誇りですね。

ポナレット：誇りですね。

高山：今、日本は平和じゃないですか。

70年も戦争が起きてないんだから、明日戦争ないでしょう、って思いながら生きている人もいると思うんですけど。

金のなる木：でも、そうとも言えないと思いますけどね。なんかモヤモヤした感じってありません？

れんげ：やっぱり、自分の息子が実際行くとなった場合、私は絶対それを親として止める。誰でも止めると思うんですけど。実際行った先で、向こうの知らない人を殺してしまう訳じゃないですか。向こうにも家庭があって、同じような立場で、お母さんも同じような気持ちでいる人が戦ったときに、お互いなにも悪いことしてないのに、お互い殺し合うっていうような戦争はやめてほしいなって思うんですよね。

高山：みなさんが、今すぐできそうな一歩ってなにかありますか？

リリー：終戦記念日とか、何々記念日っていうものをきっかけに、その近辺でやっぱりみんなで話し合っってことも必要なのかなって。

高山：きっとそのために、記念日が設けられたんじゃないかって思いますしね。

チェリー：自分も含め、全ての命を大切に。これは、ちょっとしたきっかけで話すことができるんじゃないかなって思っていますね。夏休みにトライしてみたいと思いますね。

子どもたちに質問！

「戦争」をなくすには？



「武力の存在を消す」(中学2年生・男子)

「貧富の差をなくす」(小学6年生・女子)

「資源不足だとか、領地の問題を解決してもらいたいです。」(中学3年生・男子)

「人の悪口を言わないで、自分一人一人で豊かな街を作るように努力をする」(小学6年生・女子)

「言葉遣いとかに気をつけたり」(小学6年生・女子)

「考え方が違って戦争が起こっちゃうと思うんですけど、その考え方を、相手を認め合うっていうか、こういう考え方もあるんだなっていう。それを認めて取り入れていくってことが大切だと思います。」

(中学1年生・男子)

これからのウワサの保護者会は、子育てにまつわる様々なテーマでお送りします。

お楽しみに！

みんなの知恵が集まるホームページも必見！

(終)